

SHOW-HOUSEシネマフルーツ

★★★



● ● み ど こ ろ

アニメは一枚毎に丹念な作図が不可欠だから、自動車産業と同じく、日本が世界一！『千と千尋の神隠し』(01年) 等を観る中で私はそれが当然と思っていたが、どうして、どうして！『白蛇：縁起』(19年) や『ナタ転生』(21年) 等、近時の中国の3DCGアニメのクオリティは急速に伸びてきた。それを決定的にしたのは、『ナタ 魔童降臨』(19年) の続編たる『ナタ 魔童の大暴れ』(25年) の中国歴代興行収入を塗り替える大ヒットだが、それは一体なぜ？そもそも哪吒（ナタ）とは一体ナニ？

それを知ることも大切だが、「日本昔ばなし」と同じく、中国にも「中国昔ばなし」がいっぱい！また、それは明るく楽しいものばかりではなく、妖怪をはじめとするさまざまな奇譚もいっぱいいた。

本作はそんな妖怪を中心とする4つのエピソードをまとめた奇譚だが、なぜそれが今日本で公開に！？そんな論点も考えつつ、中国昔ばなし＝奇譚を楽し味わいたい。

■■■中国アニメが大盛況！今や完全に日本を凌駕！？■■■

私はもともとアニメはあまり好きではないが、それでも、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』(01年)、細田守監督の『時をかける少女』(06年) 等は観ているし、その素晴らしさを考えれば、日本のアニメは世界一！そう考えていたが、中国流3DCGアニメとして近時大ヒットした『白蛇：縁起』(19年) (『シネマ54』263頁) や『ナタ転生（新神榜：哪吒重生）』(21年) (『シネマ54』261頁) を観ると、その認識を改めざるを得なかつた。

それに輪をかけたのが、2025年に公開された中国のアニメ・ファンタジー・アクション・冒険映画『ナタ 魔童の大暴れ（哪吒之魔童闹海）』(25年) の中国歴代興行収入を塗り替

える大ヒットだ。これは『ナタ 魔童降臨』(19年)の続編で、中国神話の登場人物・哪吒と16世紀ごろ成立の小説『封神演義』を元にしたアニメだ。

春節が始まる2025年1月29日に中国で公開された同作は、前作同様に批評家から好評を博し、商業的には前作以上の成功を収めた。製作費8,000万ドルに対し、興行収入は21億ドルを超え、中国歴代興行収入最高記録、単一市場の興行収入最高記録、アニメーション映画初の20億ドル超えにして最高記録、非英語映画初の興行収入10億ドル超えにして最高記録など、中国内外で様々な興行収入記録を打ち立てた。2025年の映画としては暫定興行収入1位で、歴代でも5位となっている。そして日本では、2025年3月14日から限定上映。また2025年4月4日に『ナタ 魔童の大暴れ』の邦題で字幕版が劇場公開されたが、その評価は?

■口■中国の老舗アニメスタジオが復活!4作が日本へ上陸!■口■

他方、インターネットで公開されている「アニメーションビジネス・ジャーナル」の2025年6月14日付Tadashi Sudo氏の投稿記事によれば、次のとおり報じられている。

中国で大きな話題を呼んだ配信アニメーションシリーズ『中国奇譚』の日本上陸が決定した。配給会社の面白映画は全8話構成の本作の中から「ワンと神様はバスに乗って行った」「妖怪くんの夏」「売店」「リンリン」の4話をピックアップ。新たに再編集して、2025年7月4日より東京・大阪・名古屋・横浜・福岡の5都市で限定上映することを明らかにした。

『中国奇譚』は中華伝統文化に根ざした物語を、現代ならではのクリエイティブと美術スタイルを融合させた怪異譚だ。中国では2023年に国内配信されるとたちまち大きな反響を呼び、公式配信だけで累計再生回数は3億4000万回を超える視聴がされた。本作が劇場スクリーンで上映されるのは、日本が世界初になる。

上映は面白映画が定期的に開催する中華映画特集上映イベント「電影祭」の一環だ。「電影祭」は日本未公開の中国の実写、アニメーション映画を積極的に紹介してきた。これまででも話題の中国アニメーションが多く取り上げられてきたが、今回は『中国奇譚』が目玉になる。

もうひとつ『中国奇譚』が注目されるのは、本作をプロデュースする上海美術映画製作所の存在だ。上海美術映画製作所は1957年に設立された中国で最も古いアニメーション制作会社のひとつだ。設立に日本人の持永只仁が関わったことで、日本でも知られる。

水墨画アニメーションで名を馳せて1950年代から70年代にかけて、『大暴れ孫悟空』、『おたまじやくしがお母さんを探す』、『ナーザの大暴れ』といった作品を多く制作した。そのクオリティは世界を驚かせた。

しかし近年は CG を駆使した大作劇場作品やアクション満載の配信シリーズの盛況で影が薄くなりがちであった。そんな中で『中国奇譚』で、老舗の存在感を見せつけたかたちだ。上海美術映画製作所がプロデュースするだけに、配信向けエンタテイメントシリーズとは一線を画した凝った表現とスタイルも特徴である。それは現在の中国アニメーションの多様さをも示している。

■■■中国独自の“怪奇譚”に注目！■■■

日本には『桃太郎』や『浦島太郎』等を代表とするさまざまな「日本昔ばなし」がある。その多くは明るく楽しいものだが、中には幽霊モノや『耳なし芳一』等の怪奇譚もある。

それは中国も同じで、たくさんの「中国昔ばなし」の中にはたくさんの怪奇譚がある。しかも、中国は面積が広く人口も多いから、怪奇譚の種類が多いのも当然だ。

しかし、本作は 1957 年に設立された中国で最も古いアニメーション製作会社の 1 つである上海美術映画製作所がプロデュースしたもの。水墨画アニメーションで名を馳せた同スタジオは、1950 年から 70 年代にかけて『大暴れ孫悟空』、『おたまじやくしがお母さんを探す』、『ナーザの大暴れ』といった作品を多く製作し、そのクオリティは世界を驚かせたらしい。

さあ、「日本昔ばなし」とは大きく趣を異にする「中国昔ばなし」を、とりわけ、そのうちの『中国奇譚』をしっかり楽しもう。

■■■4 つのエピソードから構成！■■■

中国で大きな話題を呼んだ配信アニメーションシリーズ『中国奇譚』は 8 話構成だが、今回日本で公開されたのはそのうちの 4 本。チラシによれば、その 4 つのエピソードのタイトルと内容は次のとおりだ。なるほど、なるほど・・・。



「ワンと神様はバスに乗って行った」

幼き日のふるさとの思い出、素朴な田舎の懐かしさの中に、数知れぬ謎めいた秘密が眠っている。



「妖怪くんの夏」

壮大なる『西遊記』の物語には、三藏法師や孫悟空だけでなく、名もなき妖怪たちの像も切ない日常もあった。



「売店」

北京のとある胡同（フートン）、小さな売店のそばに住む老人は、遙かな少年時代にさかのぼる記憶と幻の狭間をさまよう。



「リンリン」

吹雪に包まれた森。獅師一族の少年はある日、山で狼の習性に詳しい不思議な少女「リンリン」と出会う。彼女はいったい…？

■□■妖怪モノ2編の評価は？■□■

『妖怪くんの夏』と『リンリン』はハッキリした「妖怪モノ」。「妖怪モノ」と言えば、私は、2025年1月30日に弁天町にある「世界館」で公演されたOM (OsakaMasters) 主催の『NANKA YOKAI～何かようかい To the World～』を観てビックリさせられると共に日本のさまざまな妖怪に親しみを持つようになった。もっとも、そんなイベントに参加しなくとも、『千と千尋の神隠し』に続く宮崎駿アニメの代表作『もののけ姫』(97年) は、文句なしに面白い「妖怪モノ」だった。

それとよく似た雰囲気（？）の中華版の妖怪モノが『リンリン』だ。吹雪に包まれた森、獅師一族の少年はある日、山で、狼の習性に詳しい不思議な少女「リンリン」と出会うが、彼女はいったい・・・？

他方、『妖怪くんの夏』はタイトルに妖怪の文字が入っていることからわかるとおり、主人公が「妖怪くん」。そこに『西遊記』の物語が絡んでくるところが面白い。数多くの妖怪を支配している悪辣な妖怪のボスからの脱出を図った「妖怪くん」の運命や如何に？

■□■懐かしい時代を思い出させる昔ばなし2作の評価は？■□■

それに対して、『ワンと神様はバスに乗って行った』と『売店』は懐かしい時代を思い出させる中国昔ばなしの雰囲気いっぱいの短編だ。『ワンと神様はバスに乗って行った』の冒頭にはタイトルどおり、小さな「バスの停留場」が登場する。こんなバス停を持つ故郷に、一体どんな秘密が眠っているのだろうか？

他方、私は多くの中国旅行でさまざまな胡同（フートン）を見学してきたが、『売店』は北京のとある胡同が舞台。主人公はそこに住む一人の老人だ。小さな売店のそばに住むこの老人は、遙かな少年時代に遡る記憶と幻の狭間を彷徨うが、さて、その幻想的な世界は如何に？

2025（令和7）年7月14日記